

そこで、予め持田地区の区長（当時の集落の責任者）が相寄り『雨乞い』を催すことになり、日時・場所等が取り決められ全戸に触れが廻って来ました。

いよいよ当日、青年時代の私は、野良着に草鞋履き、水筒と握り飯を腰に下げ、兀の下の会堂の庭に行きました。兀の下が最初の出発地です。三十数人からなる行列が鐘・太鼓・幟を先頭にして歩き始めました。坂本・東光寺で各集落が合流、更に家床では桧谷・鳴野・正祐寺が合流、『雨乞い』の一行は百人程の行列となりました。行列は、長友神官を先頭に各集落からの鐘・太鼓・幟でにぎわしく、中には蓑・バッチョ笠をつけている人もあり盛大なものとなりました。

そして私達は、桧谷を通り染ヶ岡の大地へ上がり、川南の通り浜と高鍋の鳴野の中間にある「鼻切れの浜」へと向かいました。途中歩いてのこと故休憩があり喉をうるおしがなりました。

「鼻切れの浜」には洞があり全員が到着しますと「雨乞い」の儀式です。平らな所を注連縄で囲み臨時の祭壇を作り、神官さんの祝詞・区長代表の玉串奉典

・そして参加者全員の柏手で、一日も早からん雨を心から祈りました。あの狭い洞の前に大勢の人々が集まって祈っている光景は今でも忘れることができません。

こんなにして祈ったのが通じたのでしょうか。四・五日して大雨となりました。村人達は「雨乞いのお蔭じゃのう」と会う人毎に言葉を交わし田植えの準備に大忙しでした。

お盆

山下 小寺 信利

八月十三日・十五日の月遅れのお盆が近づくとどの家でも準備が大変でしたし、いろんな行事がありました。世の中の変化につれて今は残っていない行事もあります。



どんな「しきたり」があったのか思い出して紹介いたします。

(一)墓掃除

現在は火葬が多くなりお墓も先祖累代の形の石碑です。しかし、昔は土葬で一人ひとりの石碑でした。このため各家ともたくさんのお墓が並び一週間ぐらい前から、石碑の洗い方、周辺の掃除と暑い夏の仕事は大変なものでした。石碑を『かめの子たわし』や、藁を束ねての即製の『たわし』で水をかけながらゴシゴシこすって半年間の垢を落としました。当時は今のように洗剤があるではないし相当な時間がかかったのを覚えています。

掃除・除草が済むと最初は花筒替えです。墓前にお供する花は現在は陶器や塩化ビニール製の花筒に差し花筒は半永久的で花筒替えの必要はありません。しかし、むかしの花筒は竹製でした。竹は太さも長さも適当に選べるし量もありました。お盆前になると「竹筒はいらんのー」と、竹の花筒を天秤で担いだり、大八車に乗せて売りに来ていました。

勿論竹山のある家は自分で作ったものですが、そうで

ない家は買い求め

準備したものです。

この竹筒

は太陽・風雨に

さらされるとひ

びが入り一年耐

えるのがやっと

でした。それで

お盆の前にし花

筒替えの必要が

あったのです。

(二)お供え

お盆の三日間ほどの家も先祖まつりのため仕事を休み、仏壇・御霊城みたましろを清め・それぞれの家に伝わる料理を供えました。また、親類廻りをし、お互いの先祖にまいり、かつ親交を温めたものです。

私の家は神式で次のような『しきたり』になっています。



八月十三日

午前中

精霊^{しょうろ}さんは夜中にお出になるので神前

を清め、季節の野菜・果物・米の御菓子
(らくがん)等をお供えしてお待ちしま
す。

夜十二時

おはぎとお茶をあげる。そして戸主は

「ようこそお帰り下さいました。」とご
あいさつしたものです。

八月十四日

朝

ご飯・ご汁・煮つけ(必ず刻みこんぶを
入れる)

瓜の漬物

昼

ご飯・煮つけ・煮豆・おぼくじら・そー
めんの吸物・酢の物

三時

お茶と果物(家にできたもの)

晩

ご飯・みそ汁(なす・豆腐)漬物・盛皿
(畑の産物の煮物揚物)

八月十五日

朝

ご飯・みそ汁(実は変える)煮つけ・白

寒天(薄塩味で固めたものに、ぬたをか
けたもの)

昼

ご飯・おぼくじら・そーめん

三時

お茶・果物・精霊だんご(米粉をゆでピ
ンポン玉くらいに米粉をまぶしたもの)

※ 精霊さんが

帰られるのでお供
えは晩はなし。送
り火をたいて家族
一同お墓へおまい
りをした。

この他に「餓^が鬼
どん」の分として
はす葉には特別に
盛り横に置く。

八月十六日

朝早く、お供



をまとめて敷物に包み小丸川に持って 行って流した。
餓鬼どんの分も別に一包みとして流 した。

年 賀

山下 小寺 信利

私の小さい頃の正月の話です。

(三) 綱引き・盆おどり
八月十五日前から、東西北の平原・中島・山下・松本・馬場原の集落を回って、各戸薬二束・盆おどり用の大豆またはお金(当時十錢程度)を集めました。薬は十五日午前中に青年が集まり、芯に木を入れ太くて長い綱を作ったものです。

いよいよ夕方になると、平原の金比羅こんびらさんから東にかけての通りに地区が二つに分かれ、男女一緒になって勝負を競いました。地区を挙げてのお盆のなつかしい行事でした。

この綱引きの後には田中兵太郎さんの庭に集まったの盆おどりでした。老若男女幾重にもより楽しくおどったものです。途中では婦人会の労による煮豆・大人には酒も出て夜の更けるのも忘れる程でした。

小学校では、元旦に「年のはじめの拝賀式」が行われていました。午前十時から上江小学校(現在の高鍋西小)の二教室の仕切りを取った臨時の講堂に、全校児童が集まって、国歌斉唱、御真影拝賀、校長先生のお話、年のはじめの歌をうたって年の初めをお祝いしたものです。式場の中央には天皇のお写真が(御真影といっていました)飾られていたのも戦争前(明治昭和二十年)の習わしでした。

学校の拝賀式が済むともうひとつ私達には担任の先生方へごあいさつするというしきたりが残っていました。

学級担任の先生は、ある時は近くの中島にお住まいであったり、ある年は遠い中鶴でしたが毎年お伺いしました。今と違って当時の先生方全部が高鍋住まいでしたのでこのしきたりが続いていたのでしょう。この年賀には担任の先生は勿論・近くや以前お世話になった先生にもごあいさつしたので何軒にもなったものです。

先生方は学校の式が済むとすぐ自宅に帰り私達子どもの年賀を受けてくださいました。このとき私達は手作りの名刺を持っていく習わしがありました。このため私達は年の暮になると、画用紙を葉書大に切り氏名を書き数枚の名刺を準備しました。当時の子どもの正月を迎える大事な仕事でありました。

私達は、先生の家に着くと元気よく大声で「明けましておめでとうございます」とあいさつを申し上げ、持参した手作りの名刺を差し出しました。

先生は名刺を受取り、横の名刺箱に入れながら一人ひとりの子どもに今年の抱負を聞き、激励の言葉をくださいました。

このようにして何軒かの先生のお



宅を年賀のため伺いましたが、当時は歩いてです。中鶴などへ行ったときは小学校低学年ゆえ相当疲れていたし、帰宅が午後遅くになったのを覚えています。しかし、正月に先生方にあいさつをし、これで年を一つとったという満足感で疲れもふきとんだものでした。

精霊さんへのお供え

しょうろう

小丸 津江幸子

私の家ではお盆は月遅れでします。

八月十三日は、姑から引き継いだとおり精霊さんをお迎えます。事前の準備や、迎え火、送り火などもありますが、私は三日間精霊さんをお迎えしてお供えにしています。

八月十三日

夜中の十二時に精霊さんが我が家にお着きになるとのこと、朝と夜にお供えして いました。

○朝

「迎え団子」を作ります。米の粉を水で固め餡

をくるみ、竹の皮やサルカケの葉に包んで蒸したものです。これを偶数で二皿供えてお迎えのしるしとします。「しよろ菰」を敷いてその上にのせます。昔は菰は家の手作りだったそうですが、今は買うようになりました。

○夜十二時

「おてつき」のために、ぼた餅（餅米を炊いて握り、きな粉と砂糖をまぶしたもの）とお茶をお供えし、はるばるお出になった精霊さんに旅の疲れをいやしていただきます。「ようこそおいで下さいました」と言って供えます。「おてつき」とは落ち着くの意味と考えられます。

八月十四日

○朝

精霊さんは「ひもじい」といわれるので、なるべく朝早くお出するといういわれがあります。そしてこの朝から仏様のお膳でお出します。ご飯・小葉の汁・梅干・らっきょう・その他二皿精進物を作ってあげます。精進物とは、肉・魚を

使っていない料理のことです。煮しめもだします。

○昼

ご飯・精進物（すまし汁・白あえ・冷やっこ）・焼なす・漬物

○晩

お寿司・すまし汁・ほうれん草の御浸し・ごまあえ・天ぷら・酢れんこん・漬物

八月十五日

○朝

ご飯・みそ汁（小葉・豆腐・油揚げ）青菜はなんでも。ねぎは使わない。

○昼

ご飯・そうめん・西瓜・漬物

○晩 ※このときだけは遅く出します。

ころころ団子（米の粉を湯でこね、小さく丸めただけのもの）。煮しめ（油揚げ・こんにゃく・椎茸・れんこん・人参・かぼちゃ・芋類湯葉）すまし汁・酢の物（わかめ・きゅうり・はすがら）
餓鬼どんのお供え

三日間とも精霊さんのお供えとは別に、下の段に毎日
毎日それぞれのお供えから少しずつ分け取り、餓鬼ど
ん用として供えます。餓鬼どんはいつもひもじい思い
をしているというので特別扱いだそうです。

八月十六日

朝早く、お供えしていた品々をしょう菰の上に蓮の
葉を乗せ包み、舟の形にしばり小丸川へ行きます。
川では舟に線香一束に火をつけ、拝んだ後流しました。
餓鬼どんのお供えも別に包み流しました。

これで精霊さんをお迎えしてお供えは終りですが、
主婦にとってはお盆は大変な行事です。でも今は材料も
手易く求められてずい分と楽になりました。

注 餓鬼＝悪業の報いとして餓鬼道に落ちた亡者。
やせ細ったのが細く針のようで飲食すること
ができないで常に飢餓に苦しむ。

(岩波広辞苑より)

祈念きねんと十五夜綱引き

蚊口西 西森清春

私の住んでいる蚊口には昔から『祈念』と呼ばれる行
事があります。正月と五月・九月の三回、班毎の各戸持
廻りで当番の家へその地区の人々が集まり親睦を深める
ものです。

正月の「祈念」は一年最初の集いでもありそれはそれ
は盛大です。一月十五日に行われることになっています。
当番が廻ってきた家の客間には四隅に注連縄が張られ、
「ごひい」(御幣のことをこう呼んでいます)を二枚ず

つ四カ所に下げ
場所づくりをし
ます。また宴の
準備も朝から班
の人達の加勢を
得てしなければ
ならず大変なも
のです。

定刻の夜七時



になると前年の反省とその年の決めごとをいたします。

これが終るといよいよ宴会です。料理は班で多少の違いはありますが必ず出すものとして、正月には紅白の吸物・年間とおしてスルメ、落花生がありました。これに刺身・煮しめなどが加えられました。子ども達も一緒になって賑やかに時を過ごします。大人には焼酎が出されやがて歌と踊りが披露されて一層盛り上がりを見せたものです。子どもには特別にお菓子が出されますので子ども達は「祈念」を楽しみにしていました。

この「祈念」は、正月ほどではなかったとしても五月・九月と中三ヵ月おいても行われ、地域住民の楽しみな行事でありました。

行事といえば旧暦の八月十五日の綱引きは蚊口くちらばしの一大催でした。蚊口の子ども全員が上と下に分かれて鯨橋くじらばし通り（現在の蚊口橋通より北側）で大綱を引き合いました。これに使う大綱は地区の役員の運営のもと数人の大人が、浅倉さん方の大きなえのきの下に集まり、前日までに農家から集めた藁わらをなつたものでした。芯しんに唐竹

を入れ強くし、直径七寸（二十センチ）、長さ五十間（百メートル）の大綱を作り上げるのには一日がかりでした。

このようにして作った大綱を人数に関係なく最初は子ども達だけで引いていますが、観戦応援している大人達はやがてエキサイトし、後尾を木に巻きつけたり、果ては加勢するようになり勝負はいつこうにつきませんでした。

勝負の結果、蚊口上が勝ったら綱は小丸川へ、蚊口下が勝ったら綱は宮田川へ流すという「しきたり」になっていました。



もぐら打ち

青木下 阪本 高夫

もぐらは畑や庭をもぐり返して、作物や木々を傷める招かざる客で特に農家にとってはその対策に頭を傷めてきました。

もぐら打ちは、もぐらに対するこの怒りを表したものでもあり、ユーモア化した行事といえると思います。

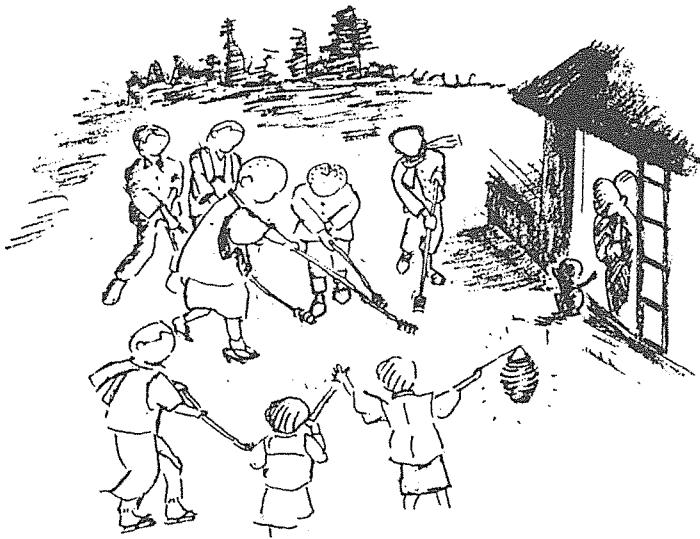
青木地区では小学校五年になると、もぐら打ちに参加させてもらえることになっていました。私は五・六年生がもぐら打ちをして廻るのを見ては「早く五年生が来ないかな」と待ち遠しかったものです。

いよいよ私にも五年生の旧正月の日がやって来ました。六年生や高等科（現中学一・二年）と一緒に作ったもぐら打ち棒は、長さ二メートル程度で子どもが手に握れる位の太さ、先に直径十センチ程の藁筒をつけたものです。そして地面に打ちつけたときよい音がするのが上等とされていました。

このもぐら打ち棒を持って日の暮れるのを今か今かとあっちいたりこっちいたり、もぐら打ちに参加する

興奮を覚えていたのが昨日のように感ぜられます。

夕方になると隣近所の男の子が棒を担いで通ります。待っていた私はついに行きました。青木は上手と下手の二つに分かれてもぐら打ちは行われていました。当時の



青木は二十戸位で廻る順も自然に決まっていたようです。どの家も靱を干す関係で庭が広くとってありましたので私達が大勢で押しかけても狭いということは感じませんでした。家の庭へ着くと「それっ」という合図で棒で地面を叩きます。叩くだけでなくそれに合わせて囃がつくのです。

もぐら打ってどんとこせ

となりのせっちんもつくりかえせ

初めての囃でしたが、簡単な文言であり、切れのいいものでしたので私は大きな声で地面を叩きました。いい音が出るのは要領を必要とし、ならせ方に工夫がいるとは後で判りましたが最初はそんなことにはかまわず強引に地面に叩きつけました。

男の子が力まかせに地面を叩くのです。集落中にもぐら打ちが始まったのはすぐ知れ渡ります。どこの家でも何回か叩きますと待ってたとばかり、「ご苦労さんじゃの。はい、これ」と言っては餅を渡してくれました。上級生が用意していた袋に入れてもらうとみんなで一斉に「ありがとうございます」とお礼を言い、またひとしき

り叩いて次へ移りました。

一軒の家で何回も叩きそして青木全戸ですので手がだるくなっただけですが、興奮していたためか一向に感ぜずあつという間に終ってしまいました。終ってみると声が少し変になっていたようでした。

終ってから上級生がもらった餅をみんなに分配してくれました。私は意気揚々と持ち帰り、家族一同で食べましたが最高の味でした。

駄^だ祈^き禱^{とら}

坂本 永友 藤男

坂本集落は、戦前四十戸足らず、ほとんどが農業で牛馬に頼っているこの作業をしていた。特に田植えの荒代かきでは牛馬はこき使われ、へとへとであった。

その関係で牛馬への感謝と、人間お互いの慰労を兼ねて旧暦の九月のウマの日にと『駄祈禱』といって集落のみんなが相集い、にぎやかに一日を過ごした。勿論牛や馬にも各戸で平素以上の質の高い飼葉を与え牛馬を^{いた}らした。

このため、坂元を上と下の二手に分け一年交替の講番制をとり、上手が接待するときは下手はお客さんといった習わしとなっていた。そしてこれに要する費用は、各戸から米一升ずつ、それに酒、料理代として等分した会費を徴収して会を運営したものである。

大正十年頃、私の若い時代のことである。前日から講番の女性の組は毎年持廻りの宿元に集まり『駄祈禱』の料理の準備にかかった。馬小屋の近くに男衆の手で風除けが作られ臨時の野外の調理場で、豆腐・コンニャク・里芋・人参・魚等の下ごしらえが、にぎやかに協力して行われたものである。

そしていよいよ当日は早朝から料理は仕上げられて宿元の座敷に並べられた。この料理には坂元特有の味付けがしてあり、講番みんなで悪知恵(?)を出し合い料理に仕掛けをする習わしで、私達下手組はその年も仕掛けをし上手組の来訪を待った。

仕掛けには、例えばコンニャクの刺身にはトウガラシを入れたり、御飯は大茶碗に押しつけ押しつけ山盛り、ぬたはうんと酢をきかすなどして、相手がとんな顔をし

て接待を受けるか楽しみにしたものである。

また、前に出たお膳の料理はすべて平げなければならないというのが坂元の「駄祈禱」のきまりであった。どうしても食べ切れない場合は隣同士で責任を持ってお腹に入れなければならないという厳しさがあり、それを講番側は楽しむというのもであった。

料理の内容にしても毎年のこと故、いろいろな仕掛けがしてあることは予想されることであり、お互いに興味深々であった。

始まると先ず一人が「講番どん、俺にや箸がついちやらんがどんげして食ぶつとのよ」と言い出す。講番はそれおいでなすったと思いつつも逆わず受けて「箸がついちやらんとはえらいすまんこっで」と言う。「氣をつけちくれにゃ困るばい。今年の講番は何しよつとのよ」と因縁をつける。何のことはない、始まる前に箸を折ってポケットに入れていたのである。

次に「俺にや、おちよこがついちやらん。焼酎は何で飲べばいっじゃろかい」と続く。箸・おちよこなどの不足が一段落してやっと箸が料理に向く。

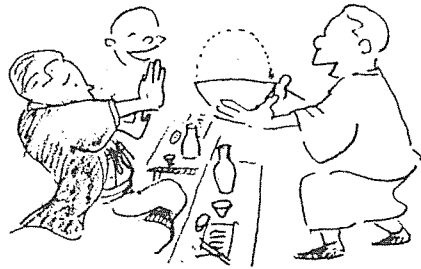
「おい、こん刺身は辛
れえー」「これやぬたじゃ
ねえー。酢づけじゃが」と接待
される側が言え、
「そうかのお、うちへんじゃこんげな味つ
けじゃけんどん」とやり返す。
お互いに困らせることを楽しみに
覚える一つの行事であった。

坂本の「駄祈禱」は「やまい

も駄祈禱」とも呼ばれたものである。当地方では、「や
まいもを掘る」といえば、常日頃の不平不満などを酒の
勢いかりて相手にぶつつけることだが、坂本集落の「駄
祈禱」が面白おかしく相手を困らせるやりとりのので、い
つしか「やまいも駄祈禱」と呼ばれるようになったもの
であろう。

この接待は昼から始まり夕方遅くにお開きになるのが
常であったが、時には明け方近くまで続いたこともあ
った。

この接待の後片付けが大変で、宿となった家（持廻り



制)で講番の女性衆はてんでこ舞いをさせられた。

全てが終ると「板敷払い」が開かれる。講番だけの今
でいう「反省慰労会」、酒の肴は今年の料理の仕掛け困
らせ、やりとりの数々で互いに笑いこけ、夜の更けるの
も忘れていた。

この「駄祈禱」は農作業の激しい時代の慰労の一つと
してなつかしい行事であった。

お接待

南町 紙屋 シマ

(下町) 黒木 みさ子

弘法大師のご命日、旧暦三月二十一日は四月の終わりの頃ですが、私達の町ではおまつりをしています。弘法大師の徳を慕い後世に伝えるために催すもので、町によってはお堂もありそこでおまつりしますが、私共の町にはお堂がありませんので当番の家をお借りしておまつりをしています。

先ず前日になると当番となる人数名は町内各戸から材料を集めます。米・お金・野菜・小豆など料理に必要な量を寄付してもらいます。「お大師さんが近づきましたのでよろしく願います」と挨拶しますと、皆さん快く出して下さいます。

この材料を使って当日の朝早くから、町内の男女が料理を作ります。私達の町で作るのは、お寿司、フカの湯がき・赤飯で弘法大師の像の前に季節の花の果物と共にお供えします。またお供えとは別に、お寿司や赤飯でたくさんのおにぎりを作り、もろぶたに用意もいたします。

この準備が終るのがお昼頃になります。

このお供えがすむと次は「お接待」です。前に述べたおにぎりを道行く人々に渡します。今と違って昔はほとんどが歩いて通行してましたので「今日はお大師さんですばい。お接待を受けちくりゃんの」と言っては縁側に招じ入れ、お茶とおにぎりで一休みしてもらったものです。ほとんどが知っている人ばかりですので呼び止められたら、お大師さんにお詣りし、労をねぎらいお茶とおにぎりをいただく「しきたり」になっていました。そんなのどかなひとときでもありました。

また、^{※注1}「ほん・ほん・今日はお大師さんじゃかり、お接待を受けち帰えんなんし」と学校の子ども達を呼び止めて、大きなおにぎりを渡すと、「おばさん、おきん」とおにぎりをほおばりながら帰っていきました。

現在は車時代です。歩く人達も少なく多忙で呼び止めることも出来なくなり、また子ども達も下校が遅くなつて、昔の「お接待」の面影が薄くなりました。昔を知る人がお訪ねくださるのを待っているお大師さんの「お接

待」となってきました。

準備したおにぎりになりますと次は私共の「板敷^{いばし}払^{はら}」です。お互いの苦勞をねぎらい、お供えしたお寿司・赤飯・フカの湯がきをいただきます。年に一回の催で苦勞も多いですが、「今年もお大師さんをおまつりできた」という満足感にひたります。

※注1 ぼん 男の子の愛称で、一人前として扱う感じが表れている。



正月祝いと神祭り

東平原 本田親徳

(一) 正月を迎えるに当たって、私の家では次のようなしきたりがありました。私の子どもの頃は厳しく守られていましたが、世の中の変化につれ、孫とも一緒に住まなくなった現在は薄れかけています。

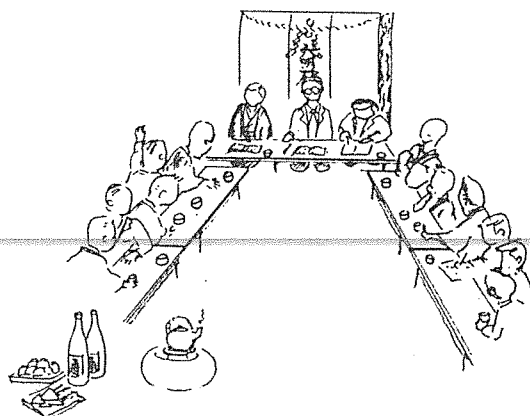
○氏神様詣り

一家の戸主(今の筆頭者のこと)の祖父が家の南東の隅の氏神様にお詣りし、御神酒・鏡餅を供え柏手を打ち、これまでのお礼と今年の一家の繁栄・健康をお願いしました。氏神様はお殿様に代々仕えて来た本田家をお守り下さったのだと、特に念を入れていました。

○祝い膳

祖父の氏神様詣りが終わるのを家族一同それぞれの座について待っていました。座の前には祖母・母・姉が何日も前から準備したお祝いの膳が置かれていました。

間もなく帰った祖父が着座して「明けましておめで



とう。今年もみんな元気で」と挨拶すると、私共は声を揃えて「おめでとうございます。今年もどうぞよろしく願います」と言って座敷に手をつきお辞儀をしました。

次いで祖父はおもむろに懷から紙包みを取り出し、私達子どもの一人ひとりに「今年も頑張るんだぞ」といいながらお年玉をくれました。私は受取りながら「はい。ありがとうございます」と大きな声でお礼を言ったのを覚えています。

お年玉渡しがすむと大人には御神酒おみきが注がれ、祖父の「乾杯」の音頭で祝宴がはじまりました。私達子どもは待っていましたとばかり「おせち料理」に箸を持っていきました。今と違って当時は卵や魚・肉など普段の日には使っていない時代で

したが、正月にはご馳走がありました。

(二) 私達の地区では、十月から十一月にかけて「神祭」をします。各家には氏神様がお祀してありますので、秋の収穫が終わると感謝の意味をこめて親類を招き祭りをするので。また、仕事で疲れた体を休め栄養を補給するというねらいもあったと思われます。

私の家の庭の南東の隅、梅の古木の下に氏神様の祠ほこらがあります。大きなものではあませんが、先祖代々お祀してきました。

お祭の前日には祠を清め周囲の草を取り掃き準備をします。

当日は前もってお願ひしておいた神主さんを迎えお祓いをしてもらいます。

この後祝宴です。手料理を出し神主さん、親類一同で和やかに過ごします。私のところで出す料理は次の通りでした。

○ばらずし

普通の「ばらずし」ですが、料理を店で売っている

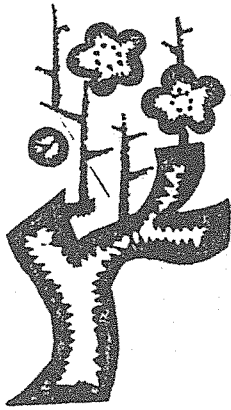
わけではなし、全て自給自足でした。特に「だし」は小丸川で釣ってきた「はぜ」を使っていたがこれが親類には喜ばれました。

○からいもようかん

○甘酒

○むかごの煮物

○ぎせい豆腐 豆腐二丁をゆでて水分をぬき、ざるに取る。別に塩と砂糖を好みに応じ加える。この豆腐と卵を混ぜたものを、油をひき和紙を敷いた鍋でゆっくり焼いたもの。これで四・五人分でしたが、私の家ではなくてはならない料理でした。



正月行事

手塚貞夫

〔師走〕

一、すす払い

十二月三十日は事初めと云って、正月を迎える準備を始める日とされている。

この日は、古くからすす払いをして家中を掃き清める。新年を迎えるには先ず清潔な住まいからと云う。

二、冬至（十二月二十一日前後）

古くから当日は早くから風呂を沸しユズで（一〇〇二〇個位）を入れ、ユズの香りただよう中に心を洗い清め新玉の年を迎える心がまえとした。

三、門松

十二月二十八日頃から十二月三十日まで各軒の門柱に若竹、松、梅、ウラジロ、ユズリ葉等を縄でくくり門松を立てて正月を迎える。

四、餅揚き

四人一組となり早朝（五時頃）から始め夜の十時頃までその日に予約して家々に餅つきを始める。

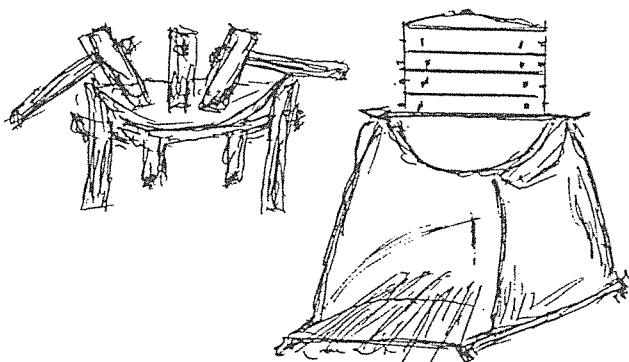
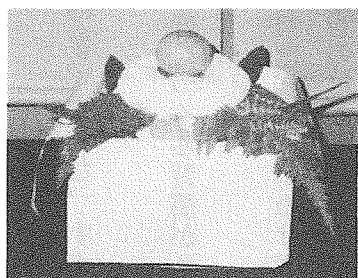
（一日に約十軒から十五軒くらいを単位としていた）

尚、現在宮田に餅搗をして廻られる中山繁さんと云う方がおられることを添えておく。

〔正月〕

一、お供飾餅

ユズリ葉、ウラジロ等で餅をかざり上段にダイダイ（柑橘類）を添え前に干柿を添えてお供餅とする。



（古くは潮の満つる時刻にお供えするしきたりがあった）

二、年飾

家長から順次年もちささげもち神酒（トソ入り）を呑み雑煮で正月を祝う。

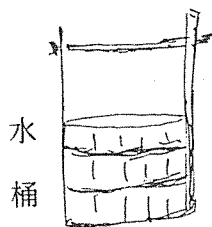
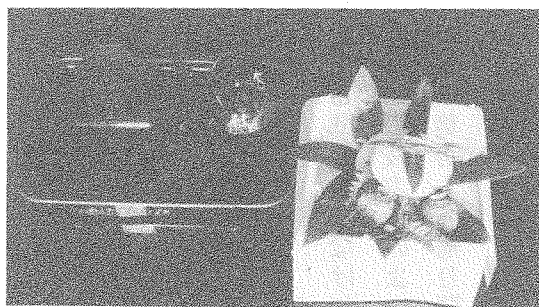
三、若水

元旦の夜明けに井戸から水桶に水を汲とり竹筒に入れ氏神、水神、先祖の神前、金戸等に供える。

残りの若水を竹筒いっぱい入れて神棚に一年間供えておく。

四、七草がゆ

春の七草花（セリ、なづ



水桶

な、ごきょう、はこべ、ほとけのぎ、すずな、すずしろ)

正月六日は春の七草を入れたかゆをつくる習慣があった。

正月以来アブラ氣の多いオセチ料理、酒氣がぬけずそのため体調がくずれがちな身体を香のおうかゆをすり健全な体で新しい一年間を家内安全を祈り幸福な家庭でありたいと願って一家そろって食した。

(ない草花はニラ、大根葉、ニンジン葉等で補った。)

ちなみに秋の七草花は(はぎ、おばな、くす、なでしこ、おみなえし、ふじばかま、あさがほ、(又は、ききょう)ですが、これは食べられません。

正月行事

○師走(十二月)に入ると外出の主婦の下駄の音(ネ)もカラコロ、カラコロの音がいつかカラコロ、カラコロと下駄の音まで気ぜわしさをさそう。いよいよ明日は(十二月十三日)すす払の日だ。街の人達は準備のため竹を求めて知り会いの家に、また旧国道の欄干橋から円福寺の下を通り国道の両側の竹をきる人

達でにぎわったものだ。

当日は座敷の「タタミ」を陽当りのよい処に干し、天井から部屋のスミズミまでススを払い又障子はハタキ(三尺位の竹の先にヌノギレをタバネタもの)でサンのよごれをハタキ落として雑巾できれいにふきあげる。又「タタミ」は竹の棒でホコリをたたき落とした上でしきおえる。雑巾できれいに「タタミ」をふきおえる。これで今日のスス払いが終わった。皆すっかりつかれているがきれいになった部屋で夕飯をたべるのも又たのしいものだった。

○そうするうちに冬至がやってくる(十二月二十一日前後)その日は早くから風呂を沸しその中にユズ(一〇〜二〇個位)を入れてユズの香がただよう中に家内全員が次々と風呂にひたり身も心ともに洗い清め新しい年を迎える心がまえとした。

○さあそうしているうちに門松を立てる準備をしなければならぬ、先ず松を切りに山に行き松の枝ぶりのよいのをきりと、次にウラジロ、ユズリ葉等もち帰り門柱に松、若竹、梅をそえウラジロ、ユズリ葉等〆縄で

くくり門松を立てる。

氏神の境内にも同様に立て祭る。これで正月を迎える準備が出来た。

○次は餅の用意である。専門の餅搗屋にたのみ、気心の知れた人達（三軒ぐらい）で組む（餅屋は前もって予約した家の前に薪を運んでおく。これは釜で薪火し米をむすための薪である。早朝五時頃から始める。一軒の家で一斗五升、二斗位のモチ米を準備し餅搗が始まる。一曰出来あがると「そら一丁あがり！」と調子をとりながらつき餅を両手にのせて取り板の上に投げ入れ、一方家内の方ではアンコ餅、普通のもち、床かざり用、神棚用、年とり用の中型の重ね餅等が手順よく出来あがる。

餅搗が終るのが正午頃。終ると皆で試食する。「ここアンコは砂糖がききすぎ、あめばかりじゃ」「うちのは塩がすぎて」「うんにゃこれくらいが丁度いい」等お茶も飲み雑談のうちに皆それぞれ持ちかえる。どれも近所の心のふれあいの一コマである。

お正月用のお供飾餅を三方に載せ、ユズリ葉ウラジロ

等で飾り上段にダイダイ（相橋類）をのせ前方に干柿をそえてお供用とし、床の間、神棚に供える（古くは潮の満つる時刻にお供えたものである。）

次に年餅を三方に載せユズリ葉、ウラジロ等でかざり前方に干柿上段に干魚を供えて年餅とする。

○いよいよお正月が来た。早朝井戸から水を水桶けに入れた竹筒に入れて、氏神、水神、先祖の神棚、釜戸神等に供え残りの水を竹筒いっぱいいいれ、神棚に供えておく。これを若水と云う。

老人達は子供がケガ等した折りその水を布ぎれにひたしキズをきれいにふきとり薬をつける（今のオキシフルみたいになつたものと思う）若水がすみ、家内全員が食台にそろう。

○前日準備した年飾り餅を家長（世帯主）から順次に三方を両手でささげ、本年〇歳になりました。本年も元気で過したいと思ひますと云いよろしく等いつてから酒（トソ）を呑み、雑煮で正月を祝う。（子供は自作の名刺をもって近所の友達の家に新年のあいさつまわりをすることものしみとしていた。）

○正月も三日、五日と過ぎ、毎日アブラ氣の多いオセチ料理、酒びたしと云った処で体もだいぶなまってきたる。

今日は正月六日七草かゆを春の草花の香りたかいかゆもつけ健全な体で新しい年間を幸福な家庭でありたいと願って一家そろって食した。古くから六日は春の七草を入れたかゆをつくる慣習があつた。

○春の七草花

セリ、なづな、ごきょう、はこべ、ほとけのざ、すずな、すずしろ

○秋の七草花

はぎ、おばな、くす、なでしこ、おみなえし、ふじはかな、あさがお（又はききょう）

十五夜祭

川田 山下 重秋

私は今 西平原より川田に転住しております。生家は、西平原金比羅様の通りを、まっすぐ行った指小路さしこうじに面した所でした。十五夜祭は毎年その指小路で、綱引きがされ、その後、山下地区にて踊りが盛大に夜を徹しての大にぎわいでした。

大正十五年、私が上江小学校高等科を卒業した年の十五夜祭の思い出です。

綱の制作、「縄ない」から始めることにします。当日は、青年団員を中心に、全員休業して地区行事に参加しました。材料の藁は各農家より指小路の中心部に集め、そこに、田中氏宅の庭に榎木えのきの太木があり、大枝が路上にはみ出しているので、その枝を利用して大綱をない上げました。

縄は三つよりにし 太さは平均の径、二十せんちcm位、総延長は、はっきり記憶しないが一〇〇〜一三〇m位あったものと推察します。

その縄ないに要した人員は、縄をよる者三人、ない手